

その世界、とある並行世界線の世界では男性が絶滅して久しかった。科学が進歩し遺伝子もまたそれに適応して変化をしていった結果、男性という存在が絶滅したのである。ではどのように人類は繁殖を行っているのか。絶滅した男性の代わりに繁栄をしたのが【女性の身体でありながら男性器をもつ存在】なのである。通称ふたなりであった。

ふたなり  
両性具有者

言葉はなんでも良いだろう、見た目は全員女性体である。街を見ても、あらゆる国を見てもこの世界には女性しかいないのだ。むさくるしい男よりも身め麗しい女性の方が良いに決まっているのだから。そんなふたなりである彼女、ユウナが今回の話の主役である。

ユウナは20代後半のOLであった。服装はいかにもデパートで購入したという安物である。安ぼったいシャツにジーンズを身に着けた冴えない人間であった。乳房はお飾り程度にしか膨らんでおらず、身長だって小さいふたなりだ。男性が絶滅した世界である、ならば彼女のようなふたなりが性的にモテるかと言われればそんな事はなかった。

彼女のようにどんくさく、陰気くさい存在はどの世界でだってモテなかったのである。有り体に言えば彼女は誰かと交際をした事がなかった。無論、性行為をした事も無かった。ただ仕事をこなし、生活をするだけの日々。自身の性癖も性欲も隠したままただこうやって生きてきた。だがそんな日々も今日で終わりだ。

故に、彼女は今日この場所へやってきたのである、【性行為奨励センター】これは国家が運営している特別センターであり、人口が減った国において性行為を全面的に解禁するという場所でもある。精子を採取したり、着床した女性の卵子を取り出して人工受精を行う事で効率よく人類の繁栄を促すという場所でもあった。

俗に言うのならば合法的な乱交場所である。この場所では合法の元、あらゆる性行為が正当化される。こうしている今も多くのカップル達や発情したふたなり達がいた。彼女たちは思い思いに抱き合い、愛を囁きあっている。きっとこれから子作りに励むのだろう。ユウナはそんな彼女達を生唾を呑みながらチラチラと横目で観察を続けていた。

早まる鼓動を抑えきれない。今日自分は本当に初めてのエッチができるのだと、そう考えるだけでじんわりとパンティーが濡れてしまう自身を抑えきれなかったのだ。

そんな彼女の元へとある一人のjkがやってきた。その女性はいかにもといった容姿をしたギャルであった。ぱっちりとした大きな二重、豊かな乳房を持つ陽気そうな女性。ゆるくふんわりと巻かれた茶色の髪とよく手入れを施されたネイルが制服女子というシチュエーションに大変似合っている。

彼女の名前はリエ。この世界におけるピッチピチの制服ビッチである。制服に身を包みお洒落に着飾った彼女はいかにも遊び人といった風貌であった。

予め伝えられていた容姿と送られてきた写真によって互いの姿を判別する。彼女はふたなりOLの姿を認識すると、ユウナに駆け寄りながらにんまりと蕩けるような笑みを浮かべた。

「こんにちわ〜リエで一す！優しそうなおねーさんで良かったあ♡」

「あっ…ユ、ユウナ…です…」

「今日はあ♡い〜っぱいエッチしましょうねえ♡」

「〜〜っ///」

突如、リエの豊満な胸元によって腕を掴まれる。ただそれだけで自身の肉棒がぷっくりと膨れ上がるのを自覚してしまうユウナ。たかがこの程度で、はしたないと自分ですら思う。気恥ずかしさから彼女の顔を直視する事が出来ないでいた。いかにも童貞臭い反応である。

そんな彼女の挙動不審な様子に気が付いたのだろうか。キョトンとした顔で小首を傾げるリエ。だが彼女は直ぐに、合点がいったとばかりに頷くとニヤけるように笑みを浮かべた。まるで小悪魔のような表情をしつつ、上目づかいで彼女に対して詰め寄った。

「あれあれ〜もしかしてお姉さん…童貞さんなんですかぁ？」

「ど、どど童貞じゃないよ！」

「うわーいかにもって反応♡だっさーい♪でもそんなのお股間を見たら一発だよ♡」

「っ！？」

「制服jk 見ただけで勃起させてるなんてキモすぎなんだけどー♡視線も泳いでてバレバレ♡」

「……っ///」

彼女の罵倒に顔を紅くさせてしまう。そう、実はリエの言う通りふたなりである彼女は性行為をしたことがなかった。つまりユウナはふたなりでありながら童貞なのである。

この世界の人間は純粋な女性と、男性器を持ったふたなりの二種類に分かれる。だが彼女のように気弱でオタク気質な存在はなんにせよカースト最下位なのである。当然、彼女と性行為をしたいという女性もいないまま、気が付けば20代後半にもなってしまったのだ。

童貞であり処女であること。それはこの世界の性行為階級においてカースト最下位の生物であることを意味する。仮に街中でこの事を指摘されたら思わず赤面してしまうだろう。リエはそっと彼女の耳に頬をよせると吐息交じりに呟いた。

「女の子の膣は熱くって狭くって♡どろどろなんだよぉ♡純粋な雌の身体はふたなりと全然違うの♪抱きしめると沈み込みそう程柔らかいんだよぉ♡」

「っ…ごくり」

「おっぱいに顔をうずめながら腰をふるとそれだけで天国みたいに気持ちいいだって♡せっまあい脛をゴシゴシしておちんぽで刺激し合うともうサイコーだって♡アタシのセックスパートナーが言ってたんだけどね♡」

「せ、セックスパートナー！？」

「おねーさんも分かるかなあ。あっそっかあ♡ドーテーだから分からないっか♪」

「〜〜っ！」

jkに耳元で淫らな言葉を囁かれる。ただそれだけでゾクゾクとした快感を感じてしまうユウナ。なんとも背徳的な行為であった。いけないことをしているという感覚がゾワリとした快感となって彼女の脳を駆け巡る。

リエによって耳元にふーと息を吹きかけられる。耳孔を通る女の吐息にぞわぞわとした快感を感じてしまう。そんな彼女に対してリエはニヤニヤとしながらとあるお願い事をした。

「ねえおち○ぽ出して欲しいなあ♡」

「え？こ、こんな所で…」

「はやく♡私ふたなりおねーさんのおち○ぽみたいなあ♪」

そう言いながらユウナの下腹部を撫でるリエ。まるで円を描くようにつつと指でなぜられる感触が堪らなく心地よい。

確かにここ性行為奨励センターでは一定区域内での性行為は許可されている。この待ち受け案内ゲートでも性行為の許可自体はされている。だがそれはSMやペットプレイなどを行うような場合であり、セックスパートナーの同意があればこそである。しかも実際にそんな露出プレイをやるなど相当のド変態のみだろう。

こうしている今だって腕を組む女性とふたなりのカップルや女性同士の恋人達が通路を歩いているではないか。彼女の視線の先にいる甘いキスを交わしあっているjkカップル同士から視線を外すと、思わずリエを見つめ返してしまうユウナ。

堪らず唾を吞んでしまう。だめだ、そんな事出来るはずもない。ユウナは思わず脚がすくんでしまった。だがそんな行為をこの小悪魔jkが許す筈もない。リエはさっと彼女の背後に回るとそのままユウナのズボンを降ろし始めたではないか。思わずぎょっとしてズボンを押さえようとするユウナにたいしてリエが淫らに囁いた。

「ど・う・て・い♡卒業したいもんねえ」

「し、したいです♡」

「なら…私の言う事聞・い・て♡」

「あ…アッ…」

「はあいおち○ぽさんこんにちわ〜♡」

彼女の言葉に意識を乱されてしまう。気が付けば自身のズボンがずり降ろされてしまったではないか。ズボンがずり降ろされた事で露わになるユウナのパンティー。彼女のデパートで購入した安物のパンティーからはみ出るように肉棒が露わになってしまっていた。見栄を張ってヒモパンツ等購入するのではなかったと後悔してももう遅い。

このドスケベビッチで自分の童貞を卒業したい！そう考えるだけでムクムクと自身のペニスが勃起してしまうのを自覚する。

ヒモパンティーの端をリエによってそっと掴まれた。そうして彼女の笑みと共にパンティーすらもが無理やり降ろされてしまう。彼女の肉棒はそれによって曝け出されてしまったのだ。なんという事だろうか。勃起した逸物が大勢の女性たちの前で曝け出された。公共の場所で露出してしまったのだ。

慌てて股間を隠そうとするユウナの腕を、さっと取るとそのまま一枚の下着でぎゅっと固く縛り上げるリエ。抵抗してももう遅い、腕に縛られたその下着によってユウナは腕の自由が効かなくなってしまったではないか。

それは一枚のブラジャーであった。どうやらリエがカバンから取り出した使用済みの下着らしい。リエは自身のバックからブラジャーを取り出すとユウナの腕をそれによって固く縛り上げたのだ。まるで犯罪者のような扱いである。

慌てて動揺してしまユウナ。そんな彼女の頭部が一枚の下着によって覆われてしまう。どうやらリエが持ってきていたパンティーを頭に被されてしまったようだ。今のユウナの状況はパンティーで視界を覆われ、腕をブラジャーによって縛られているという状況であった。あまりにもドスケベでド変な恰好である。

一組のカップルが通りかかった。若い少女のような彼女たちはド変態露出狂の姿を見ると、一瞬驚いた後、大声でけなすように笑い声をあげた。その笑い声に、更に勃起をそそり立たせてしまう彼女。

「おねーさんにプレゼント♡あたしのEカップブラジャー♡」

「あひい♡前が見えない…♡」

「今も見られてるよぉ♡あっ小さな子がこっちみて笑ってくれてる♡」

ド変態恰好のまま露出プレイに興じる彼女達。そんな彼女たちのもとへまた一人別のギャルが現れた。リエと同じような制服を身に着け派手な化粧を施した若い女。彼女はリエの元へやってくるとそのまま気軽な口調で話しかけた。

「おいおいなんだこいつは♡相当のドスケベだなぁ♡」

「っ！？」

「あっマナちゃん久しぶりー♡ここに来てたんだ♡」

「あーしもムラムラきちゃってさぁ♡適当なふたなりでも女でも釣ってセックスの方が楽しいじゃん？家でシコってオナニーなんて馬鹿らしいもんな♡」

「相変わらずのヤリマンだなぁ♡」

それは日焼けをしたギャルであった。リエの友人、マナである。マナは随分と強い日焼けをした褐色のギャルであった。くすんだ金髪と褐色の肌が彼女の気質によく似合っている。

制服を着崩した彼女の衣服からは褐色の肌がちらりと見えていた。身に着けたシャツからは紅いブラジャーが透けて見えているではないか。まるで痴女のような姿に思わずドギマギしてしまう。そんな童貞OLに対して二人のJKは淫らな会話を重ね続けた。

「このドスケベ露出狂のふたなりおねーさんが今日の相手だよ♡」

「マジやバー♪リエをネトラレたらどうしよー♪」

「あっはっは！このおねーさんは童貞さんだから無理だよぉ♪」

「うっそマジ”！その年で童貞とかウケるー♪ねえ恥ずかしくないのオネーサン♡」

「んほぉ♡」

「童貞ちんぽの感触かったー♡こいつもうマジ勃起してんじゃん♡」

「あんまり虐めないでよね。おねーさんから特別金券チケットまだ貰ってないんだから♡」

「お金でどーてい捨てるとかマジウケる！こいつプライドとかねーのかよ♡」

突如、マナに肉棒を掴まれる。やわらかい萌え袖褐色ギャルの掌の感触は意外と芯が有ってコリコリとした感触であった。きっと肉棒も雌の身体も沢山堪能してきたのだろう。意外と身長の高い褐色ギャルに至近距離から見つめられてしまう。ついで彼女が近寄った気配と香りだけで更に興奮してしまうのはきっと悲しい童貞の性だろう。

彼女のにやついた笑みが数cm程度の距離まで迫ってしまう。思わず顔が紅くなってしまうユウナ。ああこんな至近距離から見つめられているのだと。そんな彼女に対して同じくリエが寄ってくるではないか。彼女もまたにやついた笑みを浮かべると、ユウナのもう片方の身体をぴっとりと抱きしめた。そのままユウナの乳首を衣服の上から摘ままれてしまう。

肉棒を掴まれながら、乳首を摘ままれる。雄と雌としての快楽をいっぺんに味わってしまうユウナ。思わず腰が引けてしまうのも無理はない。そんな彼女の肉体を二人のギャルがそれぞれ抱きしめる事で無理やり押さえつけてしまった。右にリエ。左側にマナがぴっとりと吸い付くように寄り添う事で

淫らな女体に挟まれてしまう。両サイドから降りかかる乙女の香水のような香りにクラクラとしためまいを感じてしまう。そんな感じいつているふたなり OL に対して彼女達は淫らな言葉を囁いた。

「いっそ童貞の前に処女卒業しちゃう？もちろんお尻の穴で♡」

「ガンガンに犯してやって絶叫させてやんよ♡」

「かわいービッチギャルにアナル虐められちゃうのお♡きっと気が狂うほど最高で最低な気分が味わえるよお♡」

「ペニスバンドつけて無理やり上も舌の口も犯してあげよっかなあ♡ド変態のマゾには十分だろ♡」

「あ、あひい♡」

淫らな言葉の連続に溜らずアへ顔をしてしまう。ちらりとブラジャーの端から彼女たちの顔、その姿が見えてしまう。なんとその目に見えたのはブラウスの端から見えるのはマナの下着であった。驚くべき事に彼女が身に着けた下着布の面積は極端に少なかったのだ！どうやらマナはセクシーランジェリーを好んで身に着けるタイプらしい。

両脇から乳を押し上げるようにして身につけられたその極上にして極小のランジェリーはかろうじて乳頭を隠せている程度である。

リエもまた、負けていない。彼女の巨乳によって押し上げられたブラウスのボタンの端と端から見える生乳はどこまでもふたなり雌の欲情をそそる。端的につてむちゃくちゃ興奮してしまう。まるで降り注ぐ新雪のように真っ白なその柔肌はどこまでも肉棒を持つものを魅了するのだ。たわわに実ったその巨乳は驚異の E カップである。どうしたって視線が向いてしまうのは当然の節理だろう。

そっと腕で感じるその柔らかく、淫らな女体達にどこまでも興奮してしまう。そんな女性に対してギャルが吐き捨てるようにこう言った。

「なあんてな。今アタシは忙しいからやーめた」

「えーマナも一種にこのおねーさん犯そうよお」

「もっと可愛くて若いおんな犯してくっから。こんな OL 犯してる暇なんてないしー♪」

「あー残念だったねえお姉さん。もっと若ければ普通じゃ体験できないような SEX 出来たのになあ♡」

そう言って脚早に去っていくマナ。あんな性格が最悪なビッチギャルでも思わず視線で追いかけてしまうのは何故だろうか。彼女が去って行った後を恍惚の表情で追いかけてしまうユウナ。だがユウナは突如摘まれたペニスの刺激で振り返ってしまう。そこには少しばかり頬を膨らませたリエがいた。どうやら嫉妬したらしい。

彼女はつぶらなひとみと声色のままユウナを上目遣いで見つめた。どう見てもただの演技である。演技であるのだが…それにひっかかってしまうのは悲しいふたなりの性のせいに違いない。

「ん〜お姉さんってばマナの事見すぎ…そんなにマナが良かったのかなぁ」

「あっ…ち、ちくびコリコリしないで…っ♡」

「今はあ私の事ももっと見てほしいなぁ♡これから一緒に楽しくえっちするんだもん」

「リエちゃん…ヤ、ヤキモチ焼いてて可愛い…っ！ねっチューしょ♡♡」

「キスはまだダメー♡」

「あ〜♡」

「おねーさんのおち○ぽやばい位ビンビンじゃん♡さっお部屋までこのまま行こっか♡」

そうやってリエにおち○ぽをつままれる。まるで犬のリードを持つ調教師のようだ。そのままペニスを手に持ったまま、まるで犬を散歩させるように露出狂を歩かせるリエ。たった肉棒を掴まれただけ、ただそれだけでここまで支配感を演出できるのだから不思議なものだ。その被虐的な欲求に酔いしれる。たった一人のJKに自らの逸物を掴まれる、そんなどこまでも支配される感覚に酔いしれる。

そのまま通路を歩いていくJKと露出狂。通りすぎる度にくすくすとした笑いと通行人の痛いほどの視線を感じてしまう。

目元を覆われ、腕を後ろ手に組まされたまま歩かされる。これではまるっきりSMの奴隷役ではないか。ユウナは下半身を露出させ自身の逸物を勃起させたまま通路を歩いていく。この性癖がどうか癖になりませんようにと、そんな叶うはずもない事を神に祈りながら。

道行く人間に見られるその行為のなんと甘美な事か。そうして彼女たちはそのまま個室部屋へと向かう。まるでカプセルホテルのように幾つも並んだその空間には沢山の部屋があった。やがて彼女たちはとある個室へと入っていった。そのへやの上部にはA-32のと書かれていた。どうやらA区画の32番目の部屋という事からしい。

ここ性行為奨励センターではこのように性行為を行うための部屋が幾つも備わっているのだ。受付で手渡されたセキュリティカードを部屋の入口にかざすリエ。どう見ても利用し慣れている気配である。そのままふたなりは無理やりドアへと入れさせられる。それが終わる事のない快楽拷問の入口であるとも知らずに。ギギとさび付いた音と共にドアが閉まる気配がした・

~~~~~

個室部屋、それは性行為をする為だけの空間である。店舗型風俗店をイメージすると分かりやすいかもしれない。あるいはもっと単純に言えばカラオケ店だろうか、

幾つも連なったドアの内側には小さなシャワールームとエアコン、そして中央に置かれたベッド位いしか内装が無かった。まさしくエッチをする為だけの空間である。

少しばかり匂いを嗅いでみる、もしかしたら以前入ったカップルのえっちの名残香でも残ってはいないかとも思ったが流石は最新施設。完璧に空調が管理されたこの空間には匂い等どこにもなかった。少しばかり残念がってしまう。だがそれは裏を返せばこれから穢していく楽しみが出来たという事でもあった。

「はあい御開帳♡」

リエがユウナの顔からブラジャーを押し上げる。するとブラジャーの中身から発情しきった雌の顔が現れた。とろとろに発情しきったふたなりの瞳。その瞳には今にもハートマークが現れそうだ。

そのままリエはさっさと彼女の衣服を脱がせていった。シャツを、ズボンのチャックを降ろしながら、どこまでも手際よくふたなりの衣服を脱がしていく。彼女にしてみれば呆れるほど繰り返してきた行為である。ふたなりの衣服を脱がせるなどリエにとっては朝飯前なのだ。

恍惚の表情を浮かべるながら全裸になったOLに対してリエがニヤニヤとした笑みを浮かべながら彼女を煽った。

「ねえキスしよお♡」

「キ、キキス！？分かったよリエちゃん♡んちゅう♡」

彼女のからの御願いに二つ返事で応えるユウナ。キスというのは童貞にとって分かりやすいセックスアピールである。大丈夫、セックスドールと何度もやって練習してきた。これならばきっと…。発情しきって辛抱溜らんとした様子ユウナはそのまま彼女を乱暴に抱きしめた。ユウナはそのままリエを押し倒すと無理やり彼女の口に自身の舌を押し付けた。

端的に言えば…下手くそなキスであった。ただ口と舌を押し付けるだけの稚拙な性交。それでも必死に呼吸を荒げながらなんとか上手にキスを行おうとする彼女。そんなユウナの様子を心中であざ笑う。まるで子供が必死に大人のふりをしているような物だ。リエはちょっとだけそんな様子を可愛らしいなとも思ってしまう。

「キスへったくそお♪キスってこうやるんだよ」

～～～体験版はここまで  
続きは発売製品版にて

|       |            |
|-------|------------|
| 体験版   | 約 7800 文字  |
| 発売製品版 | 約 14480 文字 |